

野球少年の 未来のために



□

休ませるのは大人の役目

昨夏、小学生以下の日本代表侍ジャパンU12の選手を対象に実施した肘のエコー検査で、15人のうち3人に肘の腫瘍、いわゆる「野球肘」が見つかった。代表監督の仁志敏久さん(47)はすぐに「痛いか、痛くないか」を確かめた。1人が痛みがあることを打ち明けた。1カ月後のアジア選手権で、仁志さんはこの選手は代打だけの出場にとどめた。「休ませるのは当たり前。子どもの場合、何が起ころうか分からないですから」。その決断に迷いはなかった。

仁志さんはプロ野球の巨人や横浜、ベイスターズで活躍し、2014年からU12の代表監督を務め今年で6年目になる。けがを隠してしまう選手の心理を詳しく説明する。未発達にある子どもがけがをしやすいの当たり前前でもU12に限らず、レギュラー入りギリギリ

U12日本代表監督・仁志さん 自主性伸ばす指導を



仁志さんは、定期的に球界と縁のある地を回り、U12座談会も開いている。U12は、強い打球を打つためのソフトと、U12野球ボールの真ん中って「ひびき」ヒックスを出した。2010年6月、館林市羽野町で。

「考えるプレー」大切さ伝え

仁志さんは高校、大学、社会人、プロと常に一線で活躍してきた。その野球人生を支えてきたのは、常総学院時代の監督木内幸男さん(87)の存在だ。甲子園に選ばれる出場するなど高校野球では言わずと知れた名將。取手二高監督として1984年夏の甲子園決勝でPL学園を破り、全国優勝。その後、常総学院を率いて、2001年春と08年夏に優勝した。

恩師・木内幸男監督



仁志さんの恩師、木内幸男さん。表は取手二高で2017年8月18日、鈴木博樹撮影

では先を以て的確に指示を出す。一方で、選手の「考えていないプレー」には厳しくしかる。ベンチの采配だけでなく、その場の状況(プレー)に合った選手自身の臨機応変な判断も求めた。

木内さんが発する言葉、その意図を先読みするうちに、自然と自主性や積極性が身についたという。「なぜそうしたのか、自分のプレーを説明できるように常に考え、準備する。そうすればこうすればいい」という一歩に「つながる」。プロになっても適用する大切な理念を高校時代に教え込まれた。その喜びに、自らの喜びを重ねて、U12代表の指揮を執る。【神内亜美】

だったり、どんなケースであれ、多少の痛みを抱えていても試合に出たいと思うのが子どもです。だからこそ、大人が、異変に気付いて止めなくてはいけないと強調する。子どもには「お母さん、たいかやうにないか」「大丈夫か、大丈夫でないか」で聞いては駄目。

判断するのは大人の役目か」と問いかける。すぐには回答がなくても答えは言わない。ヒントやきっかけを与え、自分で考えさせる。「失敗したら頭ごなしに怒鳴るだけの指導は、積極性や自由発想する力を奪い、監督の指示を待たせたい選手が生まれてしまう原因になる」。それが、けがをしなくても、痛みがあっても、周囲に言い出せない空気を作り出してしまつたことにもつながる恐れがある。

野球少年の未来のために、と投球数制限などさまざまな改革や議論が始まっている。ただ、仁志さんは「組織やルールの問題にはかり焦点が当てられ、「一方通行」になってしまっている側面もある」と指摘する。どうして「今」の野球指導者は「悪」という見方に陥りがちだ。「でも」と仁志さんは言う。「問題を抱えているのは、野球界だけではない。どんなスポーツでも、暴力的な指導、体罰の問題がある。大人が常識を持って、スポーツを通して子どもに「半ひび」を与えるのが本当の姿だ」と願う。【神内亜美】

仁志さんはプロ引退後、筑波大学院でコーチングを学んだ。今はテレビやラジオの野球解説などをやる傍ら、野球少年の故障を減らしたいと、2019年に1回程度、館林市の慶友整形外科病院(この企画で紹介)で指導者向けに講演している。

そこで伝えているのは「子どもたちが自身で考えを導かせる」こと。一つのプレーについて「どうしてそう思ったの